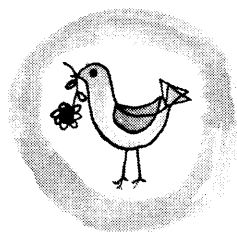


ピーボデュー・ナーサリー・スクールにて

土屋美代子



夏も過ぎはや秋の気配も濃くなった九月のある日、長男
広晃のナーサリー・スクールが始まりました。その年の四
月末、二人の子ども一歳半の女の子、それに七月に三歳
を迎える男の子ーを連れて、アメリカ・ケムブリッジに参
りましてから、すでに五ヵ月近くが経過しておりましたが、
まだカタコトの下の子はともかく、上の広晃はまだ、**㊦**、
とか **㊧**、しか口にしません。ちょうど渡米するころ、や
つと、かなり複雑な情況や、自分の感情等も表現できるよ
うになり、得意そうに友だち遊びをはじめていた彼にとつ
て、言葉の通じない世界に、いわば逆もどりのことは、
大きなショックだったらしく、英語には大変抵抗を示しま
した。かなり神経質な上に、自己主張の強い子どもですの
で子どもながら大分いら立ったのでしよう。頻尿気味には

なるし、私どもがわざと英語を使ったりすると、「英語で
お話しないで!」というありさまでしたが、次第に緩和し
て、九月始めごろには前述の始く **㊦**、**㊧**、などと気安くいっ
たり、「エッチューミー (Excuse Me)」っていうのはごめ
んなさいっていうことなんだネ」等と英語に興味を示しま
した。私もホッとして、この分ではナーサリーでも何とか
大丈夫かと期待したのですが、私の甘い予想は見事に裏切
られました。広晃は初日から大変用心深く、ほとんど私の
そばを離れようとしません。何か遊具を持ってきては私の
そばにすわりこんでやるありさまです。ここでは子どもに
無理がなく自然に離れられるようにするという方針でした
ので、初めのころは十人ほどの母親たちがおりましたが、
ついにイスラエル人と私二人きりになり、そのうちに私一

人とり残され、一ヵ月余り子ども共々ナーサリー通いという事になってしまいました。

おかげで大分期待がはずれましたが、その代り、はからずもこの国の幼児保育の一部をのぞき見ることができ、大変興味深く過ごすことができました。

私は、学問的な保育というものには全くの素人ですので、何から記してよいのかわかりませんが、まずこのナーサリーの所在地は、ケムブリッジのチャールス河沿いにあるピ―ボディテラスという、ハーバード大学の既婚者のためのアパートの中にあり、二人の特別待遇（無料）の園児を除いて、皆何らかの形で大学に関係のある人々の子どもが対象とされてきました。月謝は年額三百ドル。生活感覚からいえば一ドル百円か二百円ぐらいでしたから、総額、三万〜六万円で現在の日本の私立幼稚園なみです。この金額は、他の教会、小学校附属のものに比べても決して高い方ではありませんでした。入園はもちろん、試験などはなく、定員になれば締め切りというもので、したがって入園費とか〇〇費等というものは一切なく、その上、先生方の給料を含めた会計報告が示されており、アメリカ人の明快、合理

的な一面が見られます。

クラスは午前（八・四五〜一一・一五）と午後（一一・四五〜四・〇〇）があり、午前中は二歳八ヵ月から四歳までの子どもで、午後は五歳児にあてられており、午前中のクラスはおむつのとれていることが条件だったように覚えております。生方は、園長先生―午前は副として、午後は主として両方受け持ち―と、他に二人の先生、二人の助手で、五名でした。児童数は二十四、五名でしたから、本当に手の行き届いた保育態勢といえましょう。

先に園長先生と会いましたが、このミセス・コーネル（必ずミセス・あるいはミスをつけて、みよう字で呼ばせていました）は、日本語の『園長』からくるイメージとはほど遠い三十歳前後の魅力的なイギリス婦人で、ご主人の病院勤務のためにアメリカにこられた方で、精いっぱい仕事をし、子どもたちと共に楽しんでいく感じの方でした。午前保育の主任は、お孫さんもあるミセス・ハイタワー。もう六十過ぎとお見受けしましたが、余裕のある暖かい、それでいて年を感じさせない生き生きとした軽やかな身のこなしで、子どもたちとダンスをされる姿は、幼児教育者の理想像のようにさえ思えました。事実子どもは大

姿お慕いし、今でも「ミセス・ハイタワーの所に行こうよ」などと申します。もう一人の先生は、まだ大学を出たてだったでしょう。他のお二人から比べると、大分固い感じでした。でも、三人ともいともきれいな明るい服装、あるいは美しく華やかな花模様のスモックをはおたりされ、このような点でも子どもたちの心を楽しくひきたてるように気を配っていらしたように思われました。これは日本人の私だけが感じたことかもしれませんが、帰国致しましてから、日本の幼稚園の先生は、どうしてあんなに地味にしていらいやるのだろうかと思いました。幼稚園の中では、もっとふんい気を明るくする、子どもの心に訴えた服装をなさってもよいのではないかという疑問がわきました。

さてその保育の方法ですが、お茶の水の自由保育等というものは一切知らず、いわゆる集団保育を予想していた私はびっくりしてしまいました。先生に朝のあいさつをする、“Good Morning, Miss, Hightower.” “Good Morning, Hiro!” 絶対に欠かしたことの無い先生からの明るいあいさつを受けると、後は全く個人の自由です。おもちゃで遊ぶもの、工

作をするもの、外で遊ぶもの……この段階から欧米人の自分は自分という独立独歩の性格が作り出されるものかと、早合点したものです。

部屋はL字型に二部屋あり、南北はガラス張り、縦長の部屋の西側の壁は天井まで長四角に仕切られたたなで、いろいろなおもちゃがおいであります。そしてその横にはボクシングの練習用の砂袋が下げられ、部屋の中央には、ハサミ・クレヨン・のり・紙類といった工作用品のいろいろあるたながあります。すべて子どもが自由出し入れできるように配置されています。東側の壁ぞいには、四脚のイーゼルが配置され、それに手洗い用、台所用品用の流しが続きます。横長の部屋の突き当りはお家ごっこのセットがあり、一方のすみには本だながあり、その下はベンチになっていました。南側には小さな庭がついており、すべり台、砂場、三輪車等がおいでありました。もっと広い遊び場は少し離れた所にあります。こうしてみると、面積としてはそう広いものではないのですが、変化があり、また絵の具のそばには流し、本だなの下はベンチというように、神経細かに部屋作りがされています。

壁のたなにおいてあるおもちゃは、I egoのたぐいの組

み立てるもの、その他パズルとかおもに Play School 社で作っている、遊びながら学べるというものがほとんどでした。そして子どもが何か持ち出して遊び始めると、先生がそばへやってきて、教えたり遊んでやつたりするのです。ですから、あくまで子どもの自発性を重んじ、興味を示したらそれをとらえて伸ばしてやるという態度で臨んでおり、正直、私はこのように保育される子どもは幸福だと思いました。しかしながら、このやり方にも問題点があるように思われました。つまりこのような状況のもとにつれてこられることは、子どもにとっては、一度にたくさんのおもちゃを与えられたのと同じになってしまいます。その結果家に帰ってからすすかり落ちつきがなくなり、ソワソワと飽きっぽくなって困りました。他の日本人の方も同じようなことをいっていらっしやいました。三歳の年齢であれだけのものが自由になるというのは少し早すぎるのか、または、これが他人に左右されない自分を見つける力をつけるために通らなければならぬ免疫をつけてもらう関所なのか、私にはわかりませんが、このソワソワがおさまるのにはずいぶん長い期間かかりましたし、今でもおさまっていないのかもしれない。

こうしたおもちゃ類の他に、毎日、絵の具、工作が用意されていました。絵の具は、配色のよい三色が毎日取り換えられて用意され、子どもたちは物を描くというより、色彩の変化を楽しんでいるようでした。工作は、これまた毎日違うものが用意され、子どもも楽しみによく作って帰ったものです。内容といえば、単純な、無理をしなくてもできるもので、記憶しているものを記してみますと、

● Finger Painting (これをやっている時の目の生き生きしていること)

● 二、三色の細長いラシャ紙でマット作り

● 秋には落葉を利用した壁かけ

● 適当な大きさのボール紙、ラシャ紙にのりを貼り、そこに、貝がら、赤いいんげん豆、また色をつけた米粒、くず毛糸等をはりつけるもの

● 大きな針で端布縫い

● ストローやマカロニに色をつけて首飾り等をつくる

● 牛乳ヨーグルト等の空箱の利用

等々がありましたし、また祝日に合わせて、砂糖飴をつけたリングを作ったり、ゆで卵の色つけ、クリスマス飾り作りなどもありました。このように個々でやるものの他に、

四、五人が協力しなければならぬ大きなぬいぐるみを作ったり、また、実際に生のリングゴから、アップルソースを作ったりしていました。そして大切なことは、この時に作ったものはその日に持って帰ったことです。完成品からはほど遠いですが、今日はこれを作ったと子どもは満足して親に見せ、親も子どもが何をしてきたか想像がついたものです。

これらのものを含めての一時半余りがすぎますと、今度はおやつとなり、先生を囲んで皆で「ジュースとクッキー」をいただきます。その後の十五分ほどは、皆で歌を歌ったりのいわゆる集団保育的なことをしていましたが、この時も強制的に皆を参加させるのではなく、自然に興味が向くように仕向けていらっしやいました。その後は大体外で河風に吹かれながら遊んでいたようです。ほかに、訳も分らず怒る子どもには皆から離れてカナヅチで釘を打たせたり、またうさぎに餌をやったりでナーサリーの二時間半が終ります。

最初は手こずった広晃も、二月、三月経つ内にすっかり楽しみに通うようになりました。よく考えてみると『○○をしてはいけない』ということを経験なくした保育だった

と思います。個々の子どもたちの、何ものにもゆがめられていない創造力を、素直に伸ばしてやることに主力が注がれているように思われました。そしてこのナーサリーの場合は、おやつのおとで、短時間ではありましたが、皆で一つことを一齐にやるということもとり入れてあり、また手の行き届いていることから、ほったらかしの自由というゆがみがほとんどみられなかったように思います。しかし、いわゆる強制的な行動を要求されることがないので、何か忍耐力、執着力に一つ欠けてしまうような気がしました。

これは、アメリカの大人と子どもの世界の違いに厳しい家庭のしつけ、ひいては、神という絶対者の存在する厳肅な宗教的ふんい気の中につちかわれるのかもしれない。この点に甘くあまい日本に、こういう形の幼児教育がそのまま導入されることは問題がありますが、このナーサリーでの保育には捨て去るものは何も無いように思われました。これを書くに当たって、広晃に「アメリカの幼稚園好き？」と聞きましたところ、「お遊びは好き。アー○○やりたいなあ。でも、ゾ。ゾ。ゾ。っていつていじわるするからいや」といつておりました。子どもには言葉の通じる友だちのいることが一番のようです。